

## 目 標

天然力を活用した低コスト造林技術の普及を目指す。

## 取組内容

### 【「表土戻し」地拵箇所調査】

低コストなカンバ林造成

・保育技術の可能性の検証

- ①民有林(北海道)の天然更新完了基準の達成状況の継続調査(成長量・植生回復状況)。
- ②高密度で発生した天然更新木の密度調整(除伐)の検討。除伐試験地における成長量・更新(稚樹)調査の実施。
- ③天然更新したウダイカンバへのエゾシカ食害の影響調査。

雨竜研究林との天然更新合同調査



### 【相互交流見学会の開催】

北大雨竜研究林・幌加内町との間で相互交流見学会を行い、寒冷・多雪地域特有の森林施業課題についての地域課題共有・意見交換を実施。



今年度の総括  
次年度の予定

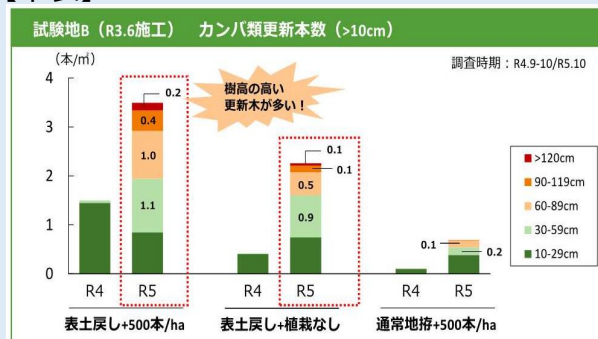
**【5年度総括】**①民有林で表土戻し地拵実施事例。当支署作成の「マニュアル」「作業動画」を提供。他署でも事業に導入しており、僅かだが表土戻し技術が広がった。道北以外での有効性についてはリサーチが必要。②北空知地域の森林造成に「表土戻し地拵」は施業方法として有効。③一方、現行保安林制度下での導入は難しい。継続調査のデータをもとに保安林での導入に向け模索が必要。④これらの取組には課題を共有する北大雨竜研究林・幌加内町との連携・協力は必須。日常的に意見・情報交換等ができる状態を作れたことは意義が大きい。  
**【6年度予定】**①表土戻し地拵箇所の継続調査 ②ハイブリッド造林(植栽+天然更新)試験地モニタリング ③「表土戻し+苗木」と「通常地拵+緩効性肥料苗木」の成長量等の比較。④これらを通じ表土戻しの新たなメリット発現。⑤今後の施業展開を考える上でも相互交流見学会をはじめとする地域連携を継続して実施し、北空知地域における天然更新技術の確立に向け共同して取組を進める。

## 結果

①3年目での民有林基準は未達成だが通常地拵より成長良好。周囲植生の回復も見られるが、植生高を脱した個体も多く影響は少ないと考察。【下表】

②除伐試験地では単木保残の更新木は成長良好だが雪害と見られる折損が散見される。今後実施する除伐(密度調整)方法が検討課題。

③30~80cmのウダイカンバで食害を確認。1m以上の更新木ではほとんど被害が見られない。更新木の成長の早さが被害回避の鍵となる可能性。  
④植栽木(クリーンラーチ)の成長量の速さと相まり、多様な森林としての成林が見込める。継続調査を実施。



- ✓ 表土戻し区は樹高の高い更新木が多かった
- ✓ 樹高30cm以上の更新木26,000本/ha (R5)、120cmを超える個体も確認

北大雨竜研究林見学会では「カンバ二次林間伐と表土戻し」「天然林択伐跡の樹冠下掻き起こし」「表土戻し6年生と密度管理」などの現場を見学。北空知支署試験地と共通する課題・施業方法等について議論を行うことができた。【写真①】

国有林見学会では、出席のあった他署等職員向けに表土戻しの取組について座学で説明【写真②】。試験地見学では表土戻し地拵と通常地拵における天然更新や植生回復の状況を比較。表土戻し地拵の事業ベースでの実施に期待が寄せられた。

このほか、見学会から連続して行われた雨竜研究林「天然更新勉強会」に他署等の職員とともに参加。表土戻しをはじめとする様々な天然更新作業を先行して研究・実施している雨竜研究林から知見のフィードバックを受けることができた。